

〈研究ノート〉

オンラインを活用した体験学習型授業の取り組み

林 翠 芳
大 塚 薫

要 旨

本研究課題は事前学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取り組みを理解し、多文化共生社会において地域振興をどのように推進していくべきか、学生の日線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。

2021年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受け、前年度に続き交換留学生の受入れが中止されたが、留学生の受講生が前年度より微増し、受講生14名のうち留学生3名と日本人学生11名による国際共修授業が行われた。また、ここ2、3年実施している企業見学はオンラインによる交流活動を行うことになったが、授業の一般的な内容については、講義内容を充実させて実施された。授業の前半は地域の現状及び課題を認識するため、ビジターセッションで県の産業政策及び中山間地域の過疎化の現状を学び、東部地域の中心都市で高校生との交流を中心とした体験学習が行われた。そして、授業の後半は多文化共生社会における地域振興を中心に異文化理解教育や県の外国人受入れ政策や高知県の取り組み状況、さらにスポーツを介したまちづくりの取り組み、また、地域に生きる大学として、地域との連携活動等に関する学びを深めた。

受講生の終了アンケート評価の結果、一連の授業の活動の満足度は5段階評価中4.4で高評価を博した。本授業を通して受講生個人が地域の現状や課題を認識し、自分事として地域との互惠関係の構築や多文化共生社会における地域振興について解決策を提案するに至ったと言える。

【キーワード】

多文化共生社会、地域文化理解、異文化理解、地域課題、地域振興、オンライン交流活動、ハイフレックス型授業

1. はじめに

本研究課題は事前学習並びに体験学習を通して地域の現状や課題・地域の取り組みを理解し、多文化共生社会において地域振興をどのように推進していくべきか、学生の目線から課題を見付け、その解決策を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。

総務省によると、多文化共生は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されており、具体的な取り組みとしては、(1) コミュニケーション支援、(2) 生活支援、(3) 意識啓発と社会参画支援、(4) 地域活性化の推進やグローバル化への対応、とある。本取り組みの課題として、受講生が最後に①「地域との互惠関係を構築するための方策」、②「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び提案することになっているが、今回はすべての受講生が②のテーマについて述べ、上記の総務省が挙げている具体的な取り組みにも触れるレポートが見受けられた。詳細については文末に挙げる受講生のレポートを参照されたい。

また、本研究課題で取り上げる体験的な教育活動の手法は、体験・実践を通して学生の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し、「教育の質的転換」が期待できると考えられる。

本研究課題は今回で5年目の実施となる。2021年10月から2022年1月にかけて、高知大学の正課の授業として共通教育社会分野科目において「地域文化理解」の授業が実施された。新型コロナウイルス感染症の影響により2020年4月より協定校から来日する交換留学生の受入れが中止されたため、受講生は正規生の日本人学生が中心となったが、留学生の受講生は2020年度より微増した。また、対面での体験活動は安芸市の高校生との交流活動のみの実施となった。過去2年間実施してきた企業見学は、今年度はMicrosoft Teamsを繋いでオンラインにより交流活動を行ったことが大きな変更点であった。さらに、日本に渡航できない留学生1名が海外からの接続であったため、対面で実施した授業及び高校生との交流活動は対面に加え、Microsoft Teams及びLINEを繋いで授業を行ったことが体験型学習におけるハイフレックス型授業の構築につながった。授業のテーマは前年度に引き続き、「多文化共生

社会」という視点を用いて地域振興を考える内容であった。

ハイフレックス (HyFlex) 型授業とは、同じ授業を対面授業とオンライン授業の双方で受講できる方法であり、Beatty (2020) ではハイフレックス型授業設計における基本価値について以下の4点が挙げられている。

- ① 学習者の選択 (learner choice) (有意義な代替参加モードを提供し、学生が毎日、毎週、または局所的に参加モードを選択できること)
- ② 同等の内容の学び (equivalency) (同等の学習成果につながるすべての参加モードで学習活動を提供すること)
- ③ 繰り返し利用できること (reusability) (各参加モードでの学習活動の成果物を「学習対象」として全学生に活用すること)
- ④ 利用者が機器・サービスを円滑に利用できること (accessibility) (学生に技術力とすべての参加モードへの公平なアクセスが提供できること)

今回ハイフレックス (HyFlex) 型授業を活用したのは海外にいる留学生1名のみであり、アンケートを見る限り大きな問題がなかったと思われるが、本稿の7-3で受講生へのフォローアップインタビューの内容を記述している。また、本授業で実施した対面授業とオンライン授業の構成については、最終アンケートで受講生の声を聞いており、今後の実施において参考にするとともに、感染対策を講じつつ、オンライン授業を行う場合、Beatty (2020) で挙げられている②同等の内容を学べること (equivalency) をいかに提供できるかが大きな課題であると考えられる。

2. 「地域文化理解」の授業概要

「地域文化理解」の授業は、2021年度第2学期に高知大学の共通教育科目社会分野科目において「地域の方との交流や体験活動を通じた教育活動を通して、受講生に地域課題を理解してもらうとともに学生の日線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探ることを目的」に開講された。

15コマの授業において、前半は地域の現状及び課題を認識する内容を中心に展開した。まず、講義 (1) (ビジターセッション①) では高知県全体の産業やその取り組み内容、課題を理解し、県全体の産業政策を学ぶ内容構成で、高知県産業振興推進部計画課の職員に講義にご協力いただいた。また、講義 (2) (ビジターセッション②) では高知県の中山間地域で過疎化が進行し、高齢者が中心となっている大豊町の現状と課題について集落活動センター「そ

ばの里 立川」の立川地区活性化推進委員会会長にお話を伺った。そして、高知県東部地域の中心都市である安芸市にある県立安芸桜ヶ丘高等学校（以下、安芸桜ヶ丘高校）の生徒との交流を交えて体験活動を行い、安芸市の現状や課題について理解し、高校生とともに町の振興について考える体験型学習を実施した。

後半は前半の高知県の現状や課題を踏まえ、多文化共生社会における地域振興のテーマを中心に授業を展開した。まず、異文化、他文化についての理解が深められるよう、授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義(3)が行われた。そして、講義(4)（ビジターセッション③）では高知県商工労働部雇用労働政策課の職員に講義にご協力いただき、高知県で暮らす外国人の状況と高知県外国人生活相談センター（ココフォーレ）の相談活動についてご紹介いただき、相談を通じた外国人の暮らしと地域との共生への支援について語られた。

また、講義(5)（ビジターセッション④）では、「課題先進県」と呼ばれている高知県が抱えている課題について、「高知ファイティングドッグス」が実施しているスポーツというコンテンツを通じたまちづくりの活動や国際交流を介したまちづくり等についてお話しいただいた。そして、講義(6)（ビジターセッション⑤）では、「地域と大学を繋ぐ活動」について本学の次世代地域創造センターの赤池准教授にお話を伺った。

さらに企業とのオンライン交流活動では、積極的に外国人社員を採用している世界で活躍する県内企業である廣瀬製紙株式会社の社員との交流を通して、多文化共生社会についての見識を深めることに繋がった。

受講生は上記の一連の活動を通して最終課題として、私の考える①「地域との互惠関係を構築するための方策」、②「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマの中から一つ選び、グループで発表するとともに自分の考えをレポートにまとめ、提出した。

授業は<表1>「地域文化理解」の授業シラバスの通り実施された。

＜表1＞ 「地域文化理解」の授業シラバス

実施日	授業内容	実施場所
10.06	協働学習 オリエンテーション、事前アンケート調査	オンライン (Teams)
10.13	協働学習 講義(1)高知県庁職員による「高知県産業振興計画について～高知県の現状と課題～」についての講義	オンライン (Teams)
10.20	協働学習 講義(2)立川地区活性化推進委員会会長による「大豊町の現状と課題」に関する講義	学内(教室)
10.27	協働学習 ①高校生が作成した安芸市・高知県等についての紹介動画の視聴、②講義(1)と講義(2)の振り返り	オンライン (Teams)
11.06	体験学習(交流) ①アイスブレイキング(レクリエーション活動を通しての交流活動)、②高校生による観光ガイド、③振り返り活動(ポスターセッション)	学外(安芸市)
11.10	協働学習 ①講義(3)授業担当者による「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関する講義、②11/06の体験学習の振り返り	オンライン (Teams)
11.24	協働学習 講義(4)高知県庁職員による「高知県で暮らす外国人の状況とココフォールの相談活動について」の講義	学内(教室)
12.01	協働学習&体験学習(廣瀬製紙株式会社とのオンライン交流) ①会社紹介・工場動画視聴、②海外人材/仕事紹介・営業部門紹介・開発部門紹介、③プレイクアートルームでの社員との交流、④質疑応答	オンライン (Teams)
12.08	協働学習 講義(5)高知ファイティングドッグス球団株式会社北古味潤氏による「スポーツと国際交流を介したまちづくり」に関する講義	学内(教室)
12.15	協働学習 講義(6)本学教員赤池慎吾准教授による「①過疎高齢化の現状と課題、②『地方創生』と日本遺産」についての講義	学内(教室)
12.22	協働学習 振り返り	オンライン (Teams)
01.05	協働学習 グループ発表の準備	対面&オンライン
01.19	グループ発表 私が考える①地域との互惠関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策	オンライン
01.26	レポート提出 私が考える①地域との互惠関係を構築するための方策、②多文化共生社会における地域振興の方策 事後アンケート調査提出	オンライン (Teams)

なお、本授業を受講した学生は14名であり、内訳としては、日本人学生が11名、留学生が3名(スリランカ出身1名、中国出身1名、タイ出身1名)である。また、日本人学生11名のうち、高知県内出身者が4名、高知県外出身者が7名である。

3. 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習(講義)

3-1 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習の概要

本研究課題では受講生が高知県の現状を認識し、幅広い視点を持って課題について考えてもらえるように、ビジターセッションにおいて見識造詣が深

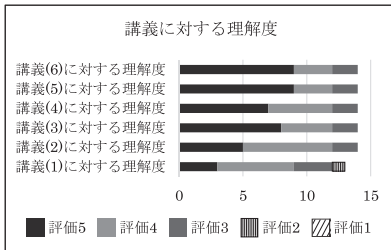
い方々の協力を仰ぎ展開した。授業の内容については、「2.『地域文化理解』の授業概要」で述べた通りである。

3-2 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習の評価

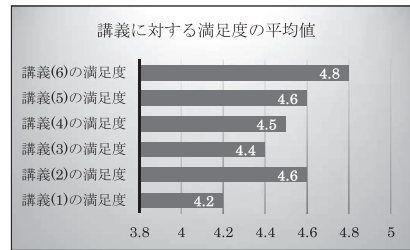
研究課題の一環として、授業並びに各活動後に受講生に振り返りを行っており、講義に関する評価は〈表2〉、〈グラフ1〉と〈グラフ2〉の通りである。講義の満足度は5点満点中、4.2ポイント以上の高い評価が得られており、受講生が意欲的に授業に取り組んだことが窺えると同時に、それぞれの講義担当者による工夫された講義が理解度と満足度の高い数値に表れ、効果的な学習効果が得られていると考えられる。

〈表2〉 講義に関する評価

NO		振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	授業形態
1	講義(1)	講義(1)に積極的に参加したか	3	5	5	0	0	3.8	13/14	オンライン
	講義(2)	講義(2)に積極的に参加したか	6	5	3	0	0	4.2	14/14	対面
	講義(3)	講義(3)に積極的に参加したか	11	2	1	0	0	4.7	14/14	オンライン
	講義(4)	講義(4)に積極的に参加したか	7	3	3	1	0	4.1	14/14	対面
	講義(5)	講義(5)に積極的に参加したか	11	1	2	0	0	4.6	14/14	対面
	講義(6)	講義(6)に積極的に参加したか	9	3	1	1	0	4.2	14/14	対面
2	講義(1)	講義(1)を聞いて高知県の産業に関する理解が深まったか	3	6	3	1	0	3.8	13/14	オンライン
	講義(2)	講義(2)を聞いて大豊町の地域活性化に関する理解が深まったか	5	7	2	0	0	4.2	14/14	対面
	講義(3)	講義(3)を聞いて多文化共生社会におけるコミュニケーション方法に関する理解が深まったか	8	4	2	0	0	4.4	14/14	オンライン
	講義(4)	講義(4)を聞いて高知県の多文化共生に向けた取り組みに関する理解が深まったか	7	5	2	0	0	4.4	14/14	対面
	講義(5)	講義(5)を聞いてスポーツと国際交流を通じた地域振興に関する理解が深まったか	9	3	2	0	0	4.5	14/14	対面
	講義(6)	講義(6)を聞いて高知県の過疎高齢化社会の現状並びに高知大学の「地方創生」の取り組みに関する理解が深まったか	9	3	2	0	0	4.5	14/14	対面
3	講義(1)	講義(1)の満足度	6	3	4	0	0	4.2	13/14	オンライン
	講義(2)	講義(2)の満足度	9	4	1	0	0	4.6	14/14	対面
	講義(3)	講義(3)の満足度	9	2	2	1	0	4.4	14/14	オンライン
	講義(4)	講義(4)の満足度	8	5	1	0	0	4.5	14/14	対面
	講義(5)	講義(5)の満足度	10	2	2	0	0	4.6	14/14	対面
	講義(6)	講義(6)の満足度	12	1	1	0	0	4.8	14/14	対面



<グラフ1>講義に対する理解度



<グラフ2>講義に対する満足度の平均値

3-2-1 講義(1)に対する評価

<表2>に示した通り、講義(1)(ビジターセッション①)では高知県の産業に関する理解については3.8、満足度については4.2の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

<表2>の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として「高知では、魚、農作物、林業など優れているところが沢山あり、それをもっと推進するためにデジタル技術でスマートにする次世代農業などと様々な工夫がされていることを知れたから」(教3年F)、「高知県は産業がかなり弱いと思っていたが、様々な取り組みをみて応援したくなったため」(人1年M)、「高知の人口や経済、産業の現状について知らないことを多く知ることが出来たから」(人1年M)、「高知の産業振興計画について初めて知ったことが多かったから」(人1年F)、「高知に関して知識を蓄える良い機会になった。知らなかった言葉も多く出てきたので、個人的に調べようと思う」(人1年M)、「表や動画を用い、具体的に説明していただき、非常にわかりやすかったため」(理2年M)等のコメントがあった。

<表2>の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「いろいろな分かりやすい動画を見せていただいたり、高知県がさまざまな努力をしていることを知ることができた。銀座にある高知のショップも気になった」(教3年F)、「資料や説明がわかりやすく、知ることができなかったことを知ることができた」(農1年F)、「丁寧な解説や説明で、県外出身の私でも内容がつかめるほど面白く、わかりやすい講義であったから」(人1年M)、「高知県の解決すべき課題を知り、本講の目的に一步近づけたから」(非正規F)、「センサーのことは見て思っていたより高知の産業が成長していると思った」(土佐3年F)等のコメントが見られた。

講義(1)は本授業がスタートして早々に行われたビジターセッションであり、オンラインのTeams上で実施されたものであり、高知全体の課題や高知県の取り組みを理解するのに貴重な講義であった。

3-2-2 講義(2)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(2)(ビジターセッション②)では大豊町の地域活性化に関する理解については4.2、満足度については4.6の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として「大豊町はいろいろな問題はありながらも、営みを実感できる里づくりを目標に笑顔で取り組んでいると聞き、人々が大豊町のために頑張っているということを知ることができたから」(教3年F)、「生活から産業まで幅広く事細かに教えていただいたため」(理2年M)、「過疎化が進行しすぎ、大豊町の年齢構成グラフが60歳以上しかいないことを知り、大豊町の方が知恵を絞りだしたからこそ出来ている地域活性化について知ることができたから」(人1年M)、「自らの実習地である、大豊町ゆとりすとパークと紐付けながら、大豊町という地域を体系的に知ることができた。一企業の視点と、地域全体の視点を比較しながら講義に取り組めた」(地域3年M)、「写真や動画によってより詳しく知ることができたから」(農1年F)、等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「大豊町は日本の地方の農村が直面している問題を抱えていて、改善するためには長い年月とコツコツとした人々の取り組みが必要なのだと思った。そして、現状を回復するために少しずつイベントもされていると知り、参加してみたいと思った」(教3年F)、「他の市町村の現状を知れ、生の声を聴くことができ自分も地域活性化のお手伝い、支援について考えることができたから」(人1年M)、「柚子やトマトを育てている大豊町の素晴らしさや日本トップクラスに高齢化が進んでいる現状を理解できたから」(人1年F)、「実際に住む人の口から聞くことで、山間地域の問題の深刻さを改めて実感した」(農1年M)、「自然と深くかかわって生きている大豊町、立川の人々の暮らし・生き様について理解できたから」(人1年M)、「大豊町の現状と課題について知り、どうすればよいのか考えることが出来た」(人1年M)等のコメントがあった。

3-2-3 講義(3)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(3)では多文化共生社会におけるコミュニケーション方法に関する理解については4.4、満足度については4.4の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「将来日本語教師になりたいと思っているため、これからもコミュニケーション法や多文化共生、関係性の構築方法など学んでいきたいと考えているため」(人1年F)、「日本では当たり前行動が海外では失礼に当たるということを理解できたから」(人1年F)、「多文化社会において、相手の国を理解して、そしてその国の国民性というものを偏った眼ではなく持つことの面白さを知れたから」(教3年F)、「他地域の人の文化を知ることは自分たちの当たり前になっている文化を批判的に見て、相手側の文化を大切にできるから」(人1年M)、「国ごとのコミュニケーションの違いやタイプの違いを理解できた」(非正規F)、「分かりやすく教えていただき、新しいことを考えるようになったため」(農1年F)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「今回の講義でノン・アサーティブ型だった自分がアサーティブなコミュニケーション法について考えたことで自分の考えを少しでも表現できるようになったと考えたため」(人1年M)、「IXを6にする方法などを考えるうえで楽しみながら異文化コミュニケーショントレーニングをすることができたから」(人1年F)、「ステレオタイプのメリット、デメリットや自分のコミュニケーション方法を客観視する機会ができたから」(人1年M)、「自分のコミュニケーションの仕方を理解できて、改善点が見つかった」(農1年M)、「表などを使い、丁寧な説明だったので講義に集中できたから」(人1年M)等のコメントがあった。

3-2-4 講義(4)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(4)(ビジターセッション③)では多文化共生に向けた取り組みに関する理解については4.4、満足度については4.5の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「高知県が外国人労働者の雇用のためにココフォーレという場所を作り支援をしたり、海外から優秀な人材を確保するために先日インドとも交流を行ったり、その

ほかにもフィリピン・ベトナム・ミャンマーなどとも友好関係を構築しているということも知ることができたから」(教3年F)、「外国人のための日本語教室や住宅の確保などの対策が行われていることが分かった」(人1年M)、「高知県における外国人の状況を理解できたから」(人1年M)、「ココフォーレが相談者と自治体や専門機関とを繋ぐ役割をしていることを理解できた」(人1年F)、「ココフォーレという団体を認知したほか、行政の視点から、外国人就労者、在留外国人などを体系的に学ぶことができた」(地域3年M)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「大変分かりやすく日本の現時点での課題(少子高齢化・生産年齢人口の減少など)を教えていただき、労働力不足を解消するために外国人人材の受け入れ・共生のために高知県が活動していることを知れたから」(教3年F)、「高知県における外国人の数や国だけでなく、ココフォーレが受ける相談内容などの詳細、雇用労働政策課が行っている外国人実習生、労働者の方への対応について知ることが出来た」(人1年M)、「日本に滞在する外国人数は年々増えているが、高知県に滞在する外国人数は日本で最下位レベルであり、労働者人口を増やすためにも外国人を増やす必要があると学べた」(人1年F)、「高知県が今どのような方針で外国人の方と共生しようとしているかの概要は把握できたため」(人1年M)、「高知県の外国人受け入れの様々な取り組みを知ることができてよかった」(農1年M)等のコメントがあった。

3-2-5 講義(5)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(5)(ビジターセッション④)ではスポーツと国際交流を通じた地域振興に関する理解については4.5、満足度については4.6の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「スポーツの力で地域の活性化から人と人をつなげることが出来ることを分かった」(人1年M)、「自身の地域を核として活動しているスポーツ団体について、今までの歴史から今後の展望まで幅広く説明していただき、地域の中で、グローバルな視点で、スポーツの持つ力の大きさを再認識することができたから」(地域3年M)、「たとえば言葉が通じなくてもスポーツを通してコミュニケーションを取ることを知ったから」(人1年F)、「世界には、多くの野球を楽しんでいる少年たちがいて、その中から球団に入団してもらったり、

韓国の野球の選手人生の短命さから入団テストをおこなったり、秘めたる才能を持つ選手の宝庫である中国にも乗り出していることに驚いた。また、南米パラグアイでの日系人との交流やJICAとの連携によって現地の野球指導者を育成していることも素晴らしいと感じた」(教3年F)、「育成リーグという名目ながらも高知県という地域に密着し、海外の実績ある選手ではなく、選手を連れてきて育てるという非常に広範囲な分野での貢献が素晴らしいと感じたから」(人1年M)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「自身が思っていた以上にスポーツには人と人をつないでいく力があるということを知れた」(人1年M)、「プレゼンの時間配分、質問に対する答え、受講生に対して楽しく授業を受けてもらうための工夫など様々な点で満足できた。プレゼンの内容も目を引くものが多かったり、外国人選手とのスキンシップもすることができ、通常の授業よりも満足度は高かった」(地域3年M)、「ファイティングドッグスは高知県の球団であるが、高知だけとの交流ではなく、これから外国人依存が高まっていく日本で、海外からの選手をみんながあたたく迎えたり、支援を行ったりと人々が協力をしていることに人の温かみを感じた」(教3年F)、「新たな視点から多文化共生社会や地域活性について学べてよかった」(農1年M)、「規模や貢献の仕方は違えど、スポーツが地域に与える影響は大きく、カテゴリーに関係なく必要なものであると改めて実感したから」(人1年M)等のコメントがあった。

3-2-6 講義(6)に対する評価

〈表2〉に示した通り、講義(6) (ビジターセッション⑤) では高知県の過疎高齢化社会の現状並びに高知大学の「地方創生」の取り組みに関する理解については4.5、満足度については4.8の高評価が得られ、満足度の高い講義内容であった。

〈表2〉の項目2の「理解の深化」に関する回答の理由として、「日本から高知、高知から中芸へと、幅広く、過疎高齢化や地方創生まで体系的に分析されており、理解ができたから。」(地域3年M)、「グラフなどの図表があり、理解しやすかった」(農1年F)、「学生の意見や感想がその地域の人々の頑張りには直結していることを知れた」(人1年M)、「中芸地域では深刻な高齢化問題があることが分かったと同時に様々な活動をしていることを知った」(人1年M)、「過去～将来の人口増減率からその原因と改善策を的確に編み出し、

他県だけでなく同県の他の地区と比較しながらデータを出しているところに工夫を感じたから」(人1年M)等のコメントがあった。

〈表2〉の項目3の「講義の満足度」に関する回答の理由として、「先生の講義内容や、授業前のコミュニケーションなどが独特で面白かった。自分の馴染みのある地域について深く知ることができ、より授業を面白く学ぶことができたから」(地域3年M)、「段階を踏んでの説明がわかりやすく、また新たに知ることが多く、新鮮だった」(農1年F)、「大学生という若さを生かして、新たな見方も提案することが地域を助けることが分かった」(教3年F)、「日本、高知、高知県中芸地域の現状と課題について知ることが出来た」(人1年M)、「自分の出身県も都会と呼ばれるわけではないので、似た環境がある高知の地方創生の取り組みについて知れたことはかなりいい機会であったと断言できるから」(人1年M)、「地方創生に大学生としてどう関わっていいのか考えることができてよかった」(農1年M)等のコメントがあった。

4. 地域の現状と課題・多文化共生に関する高校生との体験活動

4-1 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習の概要

地域の現状と課題・多文化共生に関する体験学習は2部構成で実施された。これまでは1日かけて高校生との交流を兼ねて体験学習を実施してきたが、2020年度同様感染症防止策の一環として、体験学習を半日にし、高校生が作成した動画の視聴を通して安芸市等について紹介してもらう形で事前学習を行った。

地域の現状と課題・多文化共生に関する体験学習は高知県東部地域の中心都市である安芸市にある安芸桜ヶ丘高校の生徒との交流を交えて行われた。交流活動は「地域の魅力再発見」を主軸に、安芸市の現状や課題について理解し、高校生とともに町の振興について考える内容である。具体的な活動として、(1)アイスブレーキング、(2)高校生による安芸市観光ガイド、(3)振り返り活動の3部構成で実施された。(1)と(2)の担当は高校生、(3)は高知大生という役割分担で行われた。(1)アイスブレーキングは安芸桜ヶ丘高校の会議室で行われ、4グループに分かれて活動を行った。アイスブレーキング①では、ジェンガをしながら①名前、②ニックネーム、③趣味、④好きな食べ物、⑤紹介したい観光地、⑥行きたい場所という六つの内容について自己紹介を行い、グループ活動を行った。その後、安芸桜ヶ丘高校の生徒の案内で安芸市の名所である野良時計や土居廓中、書道美術館、旧五藤家屋敷を観光した。

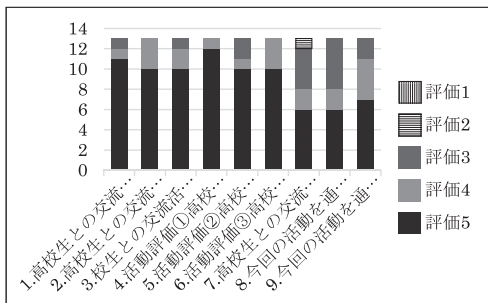
観光案内終了後、再び安芸桜ヶ丘高校に戻り4グループに分かれて地域の魅力を再発見し、地域の振興を考えるべくグループワークが行われた。具体的には、一日の活動を振り返り安芸市が地域おこしの面で抱えている課題を踏まえ、その改善策としての地域振興にふさわしい漢字一字を各グループで選択し、それを選んだ理由を皆の前で発表するポスターセッションが行われた。安芸の自然や風情をいかに外部に発信していくかについて各グループとも真剣にディスカッションを行い、それぞれのグループが選んだ漢字は「伝」(Aグループ)、「彩」(Bグループ)、「報」(Cグループ)、「観」(Dグループ)であった。全てのグループの発表を聞いた各人が相互評価を行った結果、各グループともほぼ同数の票数が得られ、甲乙つけがたい結果となった。

4-2 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習の評価

後日受講生から提出された振り返りシートの一部（5段階評価）を<表3>に示す。<表3>と<グラフ3>から読み取れるように、すべての項目の平均値が4.1ポイント以上を得ており、体験活動としては満足度の指数が高く、特に一連の高校生との交流活動において高い評価が得られた。

<表3> 安芸桜ヶ丘高校との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	高校生との交流活動に積極的に参加したか	11	1	1	0	0	4.8	13/13	1
2	高校生との交流がよくなったか	10	3	0	0	0	4.8	13/13	1
3	高校生との交流活動全体の満足度	10	2	1	0	0	4.7	13/13	1
4	活動評価①高校生とのアイスブレイキングの時間の満足度	12	1	0	0	0	4.9	13/13	1
5	活動評価②高校生による安芸市ツアーガイドの満足度	10	1	2	0	0	4.6	13/13	1
6	活動評価③高校生とのグループワークの満足度	10	3	0	0	0	4.8	13/13	1
7	高校生との交流活動で安芸市のことがよく分かったか	6	2	4	1	0	4.1	13/13	1
8	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか	6	2	5	0	0	4.1	13/13	1
9	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか	7	4	2	0	0	4.4	13/13	1



<グラフ3>安芸桜ヶ丘高校との交流活動における評価

その他、記述のみの設問としては、「安芸市をより活性化するには何がポイントか」、「安芸市の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「安芸市の観光資源について何か提案があるか」等を設定した。

「安芸市の活性化のポイント」については、「観光名所として目に残りやすくするために、各名所に細かい説明書きを加え、市ごと博物館のようにする。また、今回のように高校の授業の一環としたり、ボランティアを募ったりして観光案内人を増やす」(人1年M)、「安芸市にもっと地元観光客をまず呼び込むために、安芸IC出口に色彩豊かで目に留まりやすい看板などの設置、スタンプラリーなどで観光地を巡り最終的にお土産屋などの商業施設を作る、SNSの活用がポイントになってくると考えた」(人1年M)、「SNSを用いてアピールするのが良いと思う。ポスターや看板だと費用も掛かるが、SNSはオンラインなのでそのような物的な費用は掛からない。だから、最新の技術で若い人からも興味を持ってもらえると思う」といと思う」(人1年F)、「パンフレットの作製とSNSによる発信、そのための安芸市全体で活性化しようとする雰囲気が必要だと思う」(農1年M)、「やはり、魅力を発信していかなければならないと思う。また、中心地的存在がないことは認知されにくい原因となると感じた。このご時世ということもあり訪れる人は少なくなる一方だと思うので、イベントの企画や周知をSNSなどを通じて行うべきであるという意見が高校生側からも発言された」(人1年M)等のアイデアが寄せられ、活性化にはまず多くの人に知ってもらうこと、古き良き安芸の町並みをSNS等を通してアピールする必要があること、「観光立市」が安芸市の活性化に繋がるとの意見が多かった。

「安芸市の観光の改善」については、「もっと分かりやすい観光地案内板や

看板の誘導性不足、地域活性化に直結する商業施設の少なさによる集客率や消費購買行動の不足、SNSでの発信力不足などを改善する必要があると考える」(人1年M)、「じゃこ祭りやつつじ祭りなど魅力的なイベントをSNSや高知駅などの人が集まる場所で動画でアピールする」(人1年F)、「観光地は独特なところがあるが、知っている人は少ないと思う。人に注目されるように、イベントなどを行うべきだと思う」(非正規F)、「看板があまり目立っていなかったから、大きさや色を変えて目に留まるものにする。より有意義に安芸市を回るための観光マップを作成する」(農1年M)、「今回はガイドが同行したこともあり、観光地について認知できたが、看板などがないと訪れた人は気づかないことがほとんどであると思う。看板や情報を発信することでより観光地について知ってもらい、たまたま訪れるのではなく、観光地を目指してきてもらう観光客を増やすことが求められる」(人1年M)等の提案があった。

「安芸市の観光資源」については、「水切り瓦や武家屋敷の竹、野良時計など独自の伝統技術を広く発信する」(人1年M)、「案内板や案内表示の設置や道路に表示もしくは色などを用いて誘導を行うこと」(農1年M)、「内原野公園の弁天池で行われる『つつじ祭り』などの祭り行事の規模拡大、高校生が案内して下さった野良時計、安芸城跡のアピール(目に留まりやすい看板、案内板などで観光客誘致、誘導性の向上を図る)、また安芸市と言えばやはりちりめんじゃこが有名であるため新鮮なちりめんじゃこをSNSなどで発信、集客率や消費購買行動促進のためにお土産屋や観光客が自然に立ち寄りお金をおとせる商業施設の創設」(人1年M)、「ナスがかなり有名であると高校生から聞いた。ナスをピックアップし、美味しい地元の野菜を地域全体で盛り上げる活動をすればよいと考えた。シラスもおいしそうであったので、レストランを増やして、特産料理を発信していけばよいと考えた」(人1年M)等の具体的な提案も見られた。安芸桜ヶ丘高校の生徒によるツアーガイド等の半日の活動を通しての気づきが提案に反映されているものと思われる。

4-3 地域の現状と課題・多文化共生に関する協働学習—高大連携の効果

2018年度より本研究課題に高知県東部地域の中心都市である安芸市にある県立安芸桜ヶ丘高等学校と県立安芸高等学校の生徒との交流を組み入れ、2020年度と2021年度は感染症防止策の一環として交流人員を押さえ、安芸桜ヶ丘高校とのみ交流を実施した。

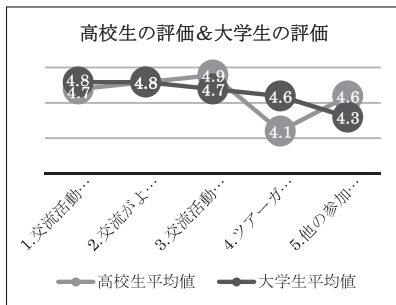
高大連携とは高校と大学が連携して行う教育活動のことであり、本研究課題は授業の一環として実施してきたが、一方、高校側は課外活動として、異文化に興味がある生徒が参加した。活動の目的は「～地域の魅力再発見～一緒に地域振興について考えよう」であり、交流活動は双方にとって有意義なものであった。活動後、高校生にもアンケートに協力してもらった交流活動の結果を<表4><グラフ4>に高校生・大学生ともに示している。項目1～3は5点満点中4.7ポイント以上の評価となっており、満足度の高さが窺える結果となっている。項目4はツアーガイドを提供する側の高校生に対しては、「大学生との交流活動で安芸市のことが案内できたか」という設問であり、ツアーガイドを享受する側の大学生に対しては、「高校生による安芸市ツアーガイドの満足度」を問う内容であった。その結果、大学生の評価が4.6ポイントであったのに対して、高校生は4.1ポイントという結果となった。高校生からは、「安芸市の課題が見つかったから」、「むずかしい言葉をあまり使わずに説明できた」、「スムーズにいてねいに案内ができた」のような自己を評価するコメントのほか、「ガイドが難しく、あまりできなかった」、「もう少し準備しておくべきだった」、「うまく話せなかったかもしれない」と謙虚に反省するコメントもあった。また、「自分が安芸市のことを知ることが大事」のようなガイドを通じて気付いたことのコメントもあった。一方、大学生は「質問に対して細かく丁寧に教えてくれた。また、用意してくれた情報を真剣に伝えようとする姿勢が伝わった」(人1年M)、「一生懸命、自分たちがリサーチした内容を発表してくださって、安芸市の課題も見つけられやすかった」(人1年M)、「全く安芸について知らない私にでも理解ができるように、分かりやすくそして詳しい説明をしてくれた」(教3年F)、「高校生の解説がなければ目に止めなかったようなスポットについて詳しくなれたから」(人1年F)、「しっかりと調べてきていたことが伝わり、内容も分かりやすかった」(農1年M)、「かなり詳しく、丁寧に説明をしてくださり、練習にかなり時間を割いたのだろうと感じたほどクオリティが高くて驚いた」(人1年M)等のコメントがあり、高校生のツアーガイドについて好評であった。

また、項目3の「交流活動全体の満足度」について、高校生から「あまり話したことの無い方たちと交流できて、たのしかった」、「楽しくゲームができ仲が深まった」、「ガイドしている時に真剣に聞いてくれた」、「大学生のみなさんは、全員フレンドリーだった」等の楽しく交流活動に参加できたコメントが多かった。一方、大学生から「高校生と大学生共に知らなかったこと

や考えたことのないことについて取り組めた」(人1年M)、「高校生からの目線、私たち大学生からの目線の違いなどを共有できただけでなく、真剣に課題について高校生と考えることができた」(人1年M)、「高校生が一生懸命安芸市について説明してくれたおかげで安芸市の素晴らしさを感じた」(人1年F)、「自分の足りない知識を蓄える機会になった。地域の問題改善に意気投合して望めた」(人1年M)、「他の地域の学生との交流が貴重で、安芸市めぐりも有意義に過ごすことができた」(農1年M)等の学びの深化につながったコメントが多く見受けられた。

＜表4＞安芸における交流活動の評価（高校生の評価&大学生の評価）

NO	高校生の評価	平均値	大学生の評価	平均値
1	大学生との交流活動に積極的に参加したか	4.7	高校生との交流活動に積極的に参加したか	4.8
2	大学生との交流がよくできたか	4.8	高校生との交流がよくできたか	4.8
3	高大学生との交流活動全体の満足度	4.9	高校生との交流活動全体の満足度	4.7
4	大学生との交流活動で安芸市のことが案内できたか	4.1	高校生による安芸市ツアーガイドの満足度	4.6
5	活動を通して、他の生徒との交流が深まったか	4.6	活動を通して、他の受講生との交流が深まったか	4.3



＜グラフ4＞安芸における交流活動の評価（高校生の評価&大学生の評価）

また、記述式のみの方設問として「交流を通じて学んだこと、感じたこと」について、高校生からは、「いろいろな県から来た人がいたので、各県の魅力や特色などを大学生どうし、高校生どうし、再発見できた」、「大学生と交流することはあまりないから今回の活動を通して大学生の考え方など色々学ぶことができた」、「安芸市をどうすれば良くなるのかわかった」、「交流活動は自分にとってとてもよい経験になった」等のコメントがあった。大学生からは、「安芸市の魅力を知り、課題や対策を多様な視点で考え、共有することが

できて、地域理解、地域活性について興味が深まった」(人1年M)、「高校生は地元である安芸市について土地勘などもあるため、他の市、県から来た私たちの目線と掛け合わせることで円滑に話し合い、議論がより深くなったように感じた。このことから、やはり地域おこし、地域活性化には地元の方の意見が必要不可欠だということを学んだ」(人1年M)、「ただ観光するだけでなく、この観光地の問題点などを考えながら観光したことでその土地の見え方が変わった」(人1年F)、「安芸市の魅力、歴史に触れることができた。その一方で、これだけの魅力を持つ安芸市が認知されていない理由や改善点について話し合うことで様々な都市との比較、発信方法を提案しあえた。桜ヶ丘高校の生徒が自分たちの暮らしている土地に関してこれだけの知識を持っていることが単純に素晴らしいと驚いたし、より安芸市について自分たちも情報を発信していかなければいけないと感じた」(人1年M)等のコメントがあった。本活動の趣旨である「～地域の魅力再発見～一緒に地域振興について考えよう」を明確に理解している内容のコメントが多く見受けられ、高大連携の取り組みが有効であることが感じられた。また、「思ったより楽しかったため時間はもっと長かった方がよかった。こんな授業がもっとあって欲しいと思った」(土佐3年F)のような有難いコメントもあった。高大連携の取り組みは相互にとってウィンウィン(win-win)の相乗効果が得られたのではないかと考えられる。

5. 多文化共生に関する企業とのオンライン交流活動

5-1 企業とのオンライン交流活動の概要

企業との交流活動については当初体験学習の一環として実際に企業に赴き、社内や工場内等の見学、社員との対面交流を予定していたが、新型コロナウイルス感染症防止のため、今年度はオンラインでの実施となった。当日は授業時間内に廣瀬製紙株式会社の協力の下、①馬醫代表取締役社長より動画を活用しての会社紹介、②海外人材/仕事紹介、営業部門紹介、開発部門紹介、③ブレイクアウトルームセッションでの4グループに分かれた社員へのインタビュー活動(教員側が事前にワークシート用意)、⑤質疑応答の五つの内容でオンライン交流活動を行った。外国人人材を積極的に採用し、海外にも事業を展開する高知県内の優良企業との交流を通して多文化共生社会における高知県の企業の取り組み状況を理解するとともに自分たちがどのように対応していくべきかを考えるきっかけになったのではないと思われる。

5-2 企業とのオンライン交流活動の評価

企業との交流活動後に受講生から提出された振り返りシートの一部を〈表5〉及び〈グラフ5〉に示す。〈表5〉から読み取れるように、項目1、2、5、8、9、10、11の廣瀬製紙との交流活動に関する評価の平均値が4.0ポイント以上を得ており、交流活動に対する満足度が高いことが窺える。一方で、企業の社員との交流がメインテーマであったため、受講生同士の交流が難しいような状況であった。

交流活動の満足度の項目を中心に見ていくと、項目8「廣瀬製紙との交流授業全体の満足度」の評価の理由として、「仕事のやりがいなど自分の将来について考える上で参考にしたい考え方を学べた」(人1年F)、「仕事に役に立つ思考を多く学んだ」(非正規F)、「企業の仕事について聞いた貴重な機会だった」(農1年M)、「普段は関わることのできない企業の方を始め、日本で働いている外国人の方からの視点も得ることができた」(人1年M)等のコメントがあった。また、「プレゼン内容はよかったのだが、インタビューの時間が十分に確保されておらず、満足いくまで会話ができなかった」(地域3年M)のような意見もあった。

項目9「廣瀬製紙が行った企業紹介の満足度」の評価理由として、「廣瀬製紙の概要を体系的に理解することができ、理解が深まった」(地域3年M)、「一番聞きたかった地域との関連、提携について聞いたので良かった」(人1年M)、「高知県に世界で活躍する企業があることを知れて良かった」(農1年M)、「簡潔でテンポよく会社の概要について紹介頂けた」(人1年M)等のコメントの通り、大変分かりやすい企業紹介を行っていただいた。

項目10「海外人材の仕事・営業部門・開発部門の社員が行った仕事内容の紹介の満足度」の評価理由として、「営業部門では窓口営業ではなく、相手の方からお話が舞い込んでくるということところにも、素晴らしい技術があるからこそである。また、開発部門では実験を幾度となく繰り返す、諦めない精神が大切だと知れたから」(教3年F)、「それぞれの社員の方々にアイデアがあり、非常に多様な考えを共有しあっていることで会社が成り立っているのだと感ずることができたから」(人1年M)、「会社の魅力と課題点を知ることが出来たから」(人1年M)等のコメントがあり、会社の各部署の役割や特徴等を理解するよい機会となったのではないかと考えられる。

項目11「ブレイクアウトルームでのグループ別インタビュー活動の満足度」の評価理由として、「自分の聞きたいことが聞けたうえ、現在の学校のことに

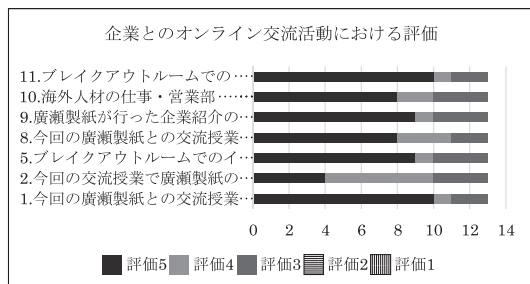
ついて相談したり社員の方のエピソードトークも聞けたから」(人1年M)、「聞いた全てのことに分かりやすく、よく答えてくれたため」(土佐3年F)、「自分たちで考えた質問を聞け、さらなる学びへと深めることができた」(人1年M)等のコメントがあり、社員の方との直接的なやり取りができたことが満足度の高い評価につながったことと思われる。また、「働いている方の日常を身近に感じられて会社の堅いイメージが崩れた」(人1年F)のようなコメントもあり、社員の方との交流がなければ得られない感想が見受けられた。

<表5> 企業とのオンライン交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	今回の廣瀬製紙との交流授業に積極的に参加したか	10	1	2	0	0	4.6	13/13	1
2	今回の交流授業で廣瀬製紙のことがよく分かったか	4	6	3	0	0	4.0	13/13	1
3	以前から廣瀬製紙を知っていたか	1	1	11	-	-	-	13/13	1
4	チャンスがあれば廣瀬製紙に就職したいか	2	1	5	5	-	-	13/13	1
5	ブレイクアウトルームでのインタビュー活動を通して社員の方とうまく交流ができたか	9	1	3	0	0	4.4	13/13	1
6	今回の活動を通して、(他の)留学生との交流が深まったか	0	1	2	3	7	1.7	13/13	1
7	今回の活動を通して、(他の)日本人学生との交流が深まったか	2	3	4	3	2	3.2	13/13	1
8	今回の廣瀬製紙との交流授業全体の満足度	8	3	2	0	0	4.5	13/13	1
9	廣瀬製紙が行った企業紹介の満足度	9	1	3	0	0	4.5	13/13	1
10	海外人材の仕事・営業部門・開発部門の社員が行った仕事内容の紹介の満足度	8	2	3	0	0	4.4	13/13	1
11	ブレイクアウトルームでのグループ別インタビュー活動の満足度	10	1	2	0	0	4.6	13/13	1

注1：3は、「知っていた」、「名前だけ知っていた」、「知らなかった」の3段階評価

注2：4は「強くそう思う」、「そう思う」、「ややそう思う」、「思わない」の4段階評価



注：<表5>NO.3、NO.4、NO.6、NO.7を除く

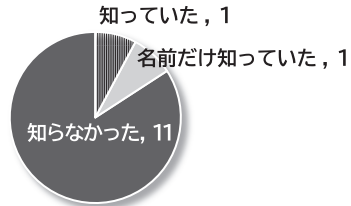
<グラフ5>企業とのオンライン交流活動における評価

<表6>と<グラフ6>に示した通り、項目3の「以前から廣瀬製紙を知っていたか」の質問に対して、「知っていた」と「名前だけ知っていた」は僅か2名であったが、項目4の「もしチャンスがあれば、廣瀬製紙に就職したいか」の質問に対して、<表7>と<グラフ7>に示した通り、「強くそう思う」が2名、「思う」が1名、「ややそう思う」が5名という結果になり、今回の廣瀬製紙との交流活動を通して、将来の就職にもつながることができ、彼らが高知の活性化に寄与することになれば、本授業の波及効果にもつながり、担当者としてはこの上ない喜びである。

<表6>

項目3. 以前から廣瀬製紙を知っていたか

質問項目	回答数	割合(%)
知っていた	1	8%
名前だけ知っていた	1	8%
知らなかった	11	84%

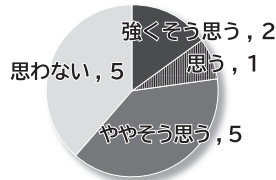


<グラフ6>項目3 廣瀬製紙の認知度

<表7>

項目4. もしチャンスがあれば、廣瀬製紙に就職したいと思うか

質問項目	回答数	割合(%)
強くそう思う	2	15%
思う	1	8%
ややそう思う	5	39%
思わない	5	39%



<グラフ7>項目4 廣瀬製紙への就職希望

6. グループ発表

最終発表は4つのグループに分かれて、「地域との互惠関係を構築するための方策」と「多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、体験学習等を通して感じたこと、考えたこと、また調べたことについて地域の産官学の関係者の参加の下、オンライン（Teams）上で行われた。今回は4グループとも「多文化共生社会における地域振興の方策」というテーマを中心に発表が進められ、多文化共生社会についての関心の高さが窺われた。

Aグループは「多文化共生社会における地域復興の方策」というタイトルで、本授業において学んできたことから見えてきた目的と課題について発表し、町おこしの提案として「高知県の情報を外国語でインターネットに掲載し、外国人が高知について知る機会を作る」、「高知県で日本らしいことができるようにする」、「高知龍馬空港を国際空港に」、「外国の方向けの高知観光プランを作る」、「外国人労働者にとってもっと住みやすい県にする」、「低価格で住める住居を作る」、「幼少期から異文化と触れ合う機会を多く作る」、「企業と農家の国際交流」、「異文化コミュニケーションをするための外国語学習の推進」等が挙げられ、最後に「これらの魅力を伝えていくために、大学生の私たちが主体的にできることを考えてやっていくことが大切」と述べた。

Bグループは「多文化共生における環境整備と新たな街づくり」のテーマで発表し、それを目指すには「日本人と外国人との交流で土台をつくることが必要不可欠」と述べた上で、「似ている都市間での文化と街づくりの融合、それに伴う地域振興と他県との差別化」という斬新なアイデアを提案した。また、「文化・街づくり融合の方法」については、3つの観点から提案し、Bグループの提案が発表終了後の投票において「一番独創的な提案」として多くの得票を獲得した。

Cグループは「高知県における外国人の意義と多文化共生」というテーマで、まず高知県における外国人の意義について、①高知県の人手不足、②財政の観点で述べた。また、スポーツビジネスの観点から①地元企業（スポンサーにあたる）との提携、②外国籍選手の獲得、海外遠征・交流試合の開催、③選手による地域振興活動の積極的参加について考察し、最後に具体的な活動として「有名でない観光地の発信」、「伝統文化を知り体験する活動を行う」という提案がなされた。

Dグループは「多文化共生社会に適応するために」をテーマに、まず、在留資格の取得支援について提案した。次に、コロナ禍の中、既に行われているインターネットを利用した国際交流の成功例を紹介し、「Zoomなどのオンライン会議ツールを利用した交流イベント」、「自分たちの地域の文化や特色などを知ってもらうためのPVなどを作成しあう」という提案をした。最後に、「多文化共生社会に適応するにはほかの文化をよく知り、寄り添いあっていくことが重要、私たちができることは何か」という問いかけで締めくくった。

発表終了後「一番独創的な提言をしたグループ」と「一番発表がよかったグループ」について受講生を含め、参加者に投票してもらったところ、どち

らもBグループが最多の得票数を獲得したという結果になった。

7. 授業終了アンケート結果

授業終了後に授業全般に対して地域文化理解の深化、地域住民との交流や理解の深化、受講生同士の交流による多文化理解の深化、授業の取り組みや満足度等についてアンケートを取った。その結果について7-1で見ていきたい。

7-1 活動全般に関する評価

<表8>及び<グラフ8>と<グラフ9>に示した通り、授業終了時に実施したアンケート結果では、項目4、5の「留学生との交流」についての評価を除き、概ね高い評価が得られた。前述した通り、2021年度は留学生の受講生が3名のみだったため、交流の機会が少なかったことが低い評価につながったと考えられる。

以下、いくつかの主要な項目における受講生のコメントを紹介していく。

まず、項目1の「授業を受けて、地域文化に対する理解が深まったか」について、「様々なジャンルの地域振興に触れることができた」(地域 3年M)、「普段交流のない企業の方や農家の人の話を聞くことが出来、理解が深まった」(人 1年M)、「他県から高知に住み、未知の発見が多数ありそれらを理解することはとても興味のあるものであった」(人 1年M)、「地域文化の取り組みや高知県の魅力を知ることができた」(農 1年M)、「様々な観点から高知を見つめなおすことができた」(教 3年F)、「現地の方々の生の声や問題を聞け、改善点を見つけることができた」(人 1年M)等のコメントが寄せられた。

項目8の「一連の授業の活動の満足度」については4.4ポイントが得られ、「貴重な話からグループワークを通じた授業でためになることが多々あった」(人 1年M)、「他県の魅力を、グループワークなどを通して理解する授業は、自分が求めていた授業イメージと一致したため非常に楽しかった」(人 1年M)、「ほとんどの講義に校外からのゲストに来ていただくことができて、とてもおもしろい話をたくさん聞くことができた」(教 3年F)、「留学生や安芸市の高校生など関わることのなかった方々と関わる貴重な機会をいただけた」(人 1年F)、「授業で企業の方々や地域の方々との交流があり、貴重な体験になった」(農 1年F)等のコメントがあった。また、「高知を知るきっかけ

けとなり楽しかった。しかし、コロナで、対面で活動やプレゼンができなかったこと。そしてアンケートの記入が難しいことが『かなり』を選択した理由」(人 1年M)、「面白い授業だが、オンラインであったのは残念」(土佐3年F)、「活動的な場面が少なかった」(理 2年M)等の対面授業を望むコメントが寄せられた。本授業は対面とオンラインを半々の割合で実施したが、7-2で述べるように、オンライン授業よりも対面授業を望んでいる学生が多かったとともに、コロナ禍の中、体験学習が1回しか組めなかったことが評価の対象となったことが窺える。

項目9の「一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度」については、①②⑤⑥⑧⑨の講義、④の体験活動及び⑦の企業との交流についてはいずれも4.1ポイント以上の高評価が得られ、本課題の取り組みが有効であったことが見受けられた。

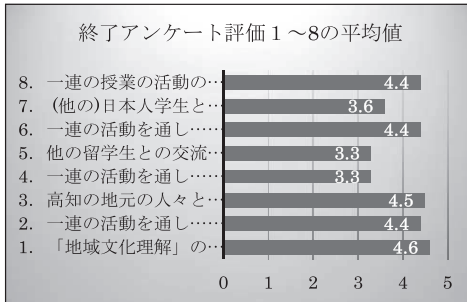
<表8> 終了アンケートの評価

NO	内容	5	4	3	2	1	平均値	回答数	不参加
1	「地域文化理解」の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか	10	3	1	0	0	4.6	14/14	-
2	一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか	8	3	3	0	0	4.4	14/14	-
3	高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか	8	4	2	0	0	4.5	14/14	-
4	一連の活動を通して、(他の)留学生との交流はできたか	4	2	4	2	2	3.3	14/14	-
5	(他の)留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	3	4	3	2	2	3.3	14/14	-
6	一連の活動を通して、(他の)日本人学生との交流はできたか	8	3	3	0	0	4.4	14/14	-
7	(他の)日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	3	7	1	1	2	3.6	14/14	-
8	一連の授業の活動の満足度	6	7	1	0	0	4.4	14/14	-
9	一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度								
	①高知の現状と課題に関する講義	4	6	3	0	0	4.1	13/14	1
	②大豊町の現状と課題に関する講義	9	4	1	0	0	4.6	14/14	-
	③交流活動事前学習(高校生が作成した動画視聴)	8	3	2	0	0	4.5	13/14	1
	④安芸観光・ワークショップ・高校生との交流	10	2	1	0	0	4.7	13/14	1
	⑤異文化理解・異文化コミュニケーションに関する講義	9	3	2	0	0	4.5	14/14	-
	⑥高知における多文化共生社会及び地域振興に関する講義	9	3	1	0	0	4.6	13/14	1
	⑦企業との交流(廣瀬製紙の社員との交流)	6	5	2	0	0	4.3	13/14	1
	⑧スポーツを介したまちづくりに関する講義	12	1	1	0	0	4.8	14/14	-
	⑨地域と大学を繋ぐ活動に関する講義	9	3	2	0	0	4.5	14/14	-
	⑩最終グループ発表会	9	5	0	0	0	4.6	14/14	-

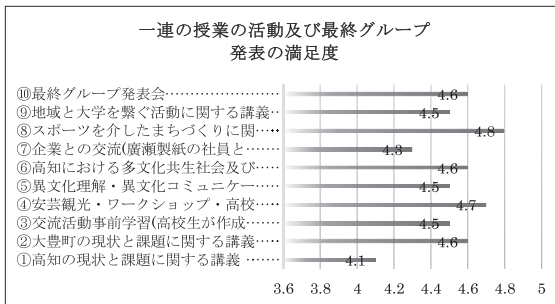
注1：5段階評価

十分 ← 5・4・3・2・1 → 不十分

理解が深まった ← 5・4・3・2・1 → 理解が深まらなかった



<グラフ8> 終了アンケートの評価 項目1～8



<グラフ9>一連の授業の活動及び最終グループ発表の満足度 項目9

7-2 オンライン授業に関して

新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度より多くの授業が余儀なくオンラインでの開講となり、本授業でもオンラインライブ授業と対面授業が半々で行われた。また、まだ渡日できない留学生に対しては対面で行われた授業及び体験活動をハイブリット型で提供した。最終アンケートでは、7-1で述べた評価のほか、対面授業とオンライン授業に対する受講生の考えも聞いた。

7-2-1 対面授業VSオンライン授業の形態

対面授業とオンライン授業の授業形態について下記の設問をしたところ<表9>と<グラフ10>のような回答を得た。その結果、半数の受講生が「対面授業のみ」を望んでいるという結果となった。

「対面のみ」の理由として、「対面授業の方が交流やグループ活動をしやすいから」（非正規 F）、「実際に活動したり、対面したりしないと伝わりにくいこともあるから」（理 2年 M）、「対面の方が授業に集中でき、高知県についての課題や問題点をリアルタイムに真剣に考えることができるため」（人 1年 M）、「対面の方が集中力、理解力が高まるから。実際に目を見て話を聞くことで思いがより伝わるから」（農 1年 M）、「対面の方が、接続トラブルがなく、講義をしてくださる方の生の声を聞けることで興味や理解が深まるから」（人 1年 F）等の理由が述べられた。

「対面授業とオンライン半分ずつ」については、「必要な授業は対面で、オンラインでできることはオンラインで、適材適所だった」（地域 3年 M）、「完全オンラインにしてしまう受動的な授業の場合、理解度や集中力が低下するため、グループワークはオンラインで行い授業は基本対面で良いと感じた」（人 1年 M）、「今後の感染状況を考えるとオンライン授業の方が良いが、やはり対面形式で他人と交流できることは講義を進めるうえで非常に重要であるため、間をとって今年度と同じ構成が良いと考えた」（人 1年 M）、「たまに違うことでとても新鮮だから」（教 3年 F）」等の考えが示された。

「ハイフレックス型」については、「その日の体調によって外に出れるか出れないかがあるため」（農 1年 F）、「自分に合った方法で受講できる」（理 1年 M）とのコメントがあり、どちらのコメントも前述のBeatty (2020) が挙げているハイフレックス型授業設計における基本価値の①学習者が選択できること（learner choice）に該当する。

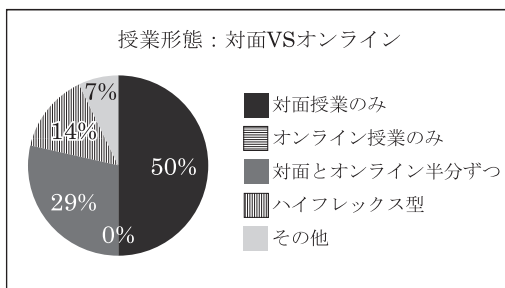
また、「今回の対面授業とオンライン授業を半々ずつ実施したハイブリット型授業の良い点と改善点／問題点」を尋ねたところ、良い点については、「オンラインでグループワークは気軽に発言しやすかった」（人 1年 M）、「対面形式でデジタルセッションに参加できることは、オンラインで話を聞くより確実に頭に入るし内容が理解しやすい。また、グループ活動においても対面形式で行う方が、絶対的に効率が良いし作業がはかどる、意見の交換もしやすいと思う。コロナのリスクを考えてオンライン授業の数を調整できる点もよい」（人 1年 M）、「両方活用することで怠け癖になることを防ぎ、モチベーションを保つことができる点」（人 1年 M）、「授業にあわせて対面かオンラインかを変えることで学校に行く、来てもらう負担が減る点」（農 1年 M）、「毎回違うので、いつも新鮮で楽しかった」（教 3年 F）、「対面でないと触れ合えない人と触れ合えつつ、対面とほぼ変わらない授業をオンラインで

聞いたこと」(人 1年 F)、「適材適所を实践できていた。教員の授業構成と見極めるバランスが良かった」(地域 3年 M)等のコメントがあった。

そして、改善点/問題点については、「混乱してしまうところ」(農 1年 F)、「オンラインでのグループワークは班のメンバーによっては効率が非常に悪いところも生まれると思う」(地域 3年 M)、「次回の授業がオンラインで行うのか対面で行うのか、わからなくなる時があった」(人 1年 M)、「コロナの感染状況に左右されやすい難点がある。今年度は安芸市の学生と交流出来たので良かったと思うが、もし感染状況が拡大し、交流会が中止になる、またはオンラインで行う場合は今回のようなお互いが満足できる経験は得られなかったと思う。計画を立ててもそれが急に変わられてしまう点は改善のしようがない難点である」(人 1年 M)、「いちいち対面かオンラインかを確認しなくてはならない」(理 1年 M)等のコメントがあった。

<表9>授業の構成はどのような形態が適当だと思うか

質問項目	回答数	%
対面授業のみ	7	50%
オンライン授業のみ	0	0%
対面とオンライン半分ずつ	4	29%
ハイフレックス型	2	14%
その他	1	7%



<グラフ10>授業形態

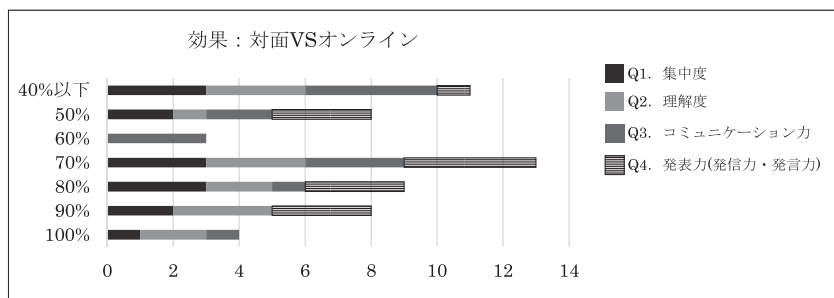
7-2-2 対面授業VSオンライン授業の効果

オンライン授業を実施する場合、その効果について対面授業を100%とした上でオンライン授業の集中度、理解度、コミュニケーション力(話し合い

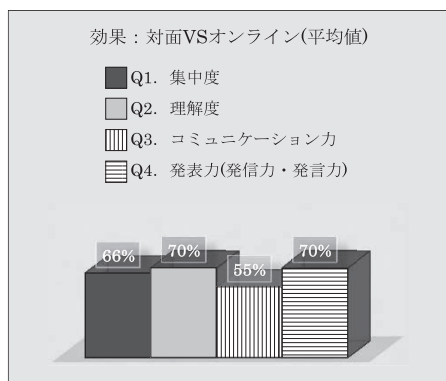
の進行)、発表力(発信力・発言力)を質問したところ、理解力と発信力の平均値が70%、集中度が66%、コミュニケーション力が55%という結果になった。しかし、100%と90%の回答がある一方、40%以下の回答も一定数あるため、今後授業の実施形態を検討するにあたり参考になる回答が得られた(〈表10〉参照)。

〈表10〉効果：対面VSオンライン

項目	%	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%以下	平均
Q1. 集中度		1	2	3	3	0	2	3	66%
Q2. 理解度		2	3	2	3	0	1	3	70%
Q3. コミュニケーション力		1	0	1	3	3	2	4	55%
Q4. 発表力(発信力・発言力)		0	3	3	4	0	3	1	70%



〈グラフ11〉 効果：対面VSオンライン



〈グラフ12〉 効果：対面VSオンライン (平均値)

7-3 ハイフレックス型授業をオンライン受講した受講生の感想

新型コロナウイルス感染症の影響により渡日できずタイ現地から受講せざるを得なかった受講生1名の感想によると、現地からのアクセスによる受講も問題なく授業の目的に沿った学びが得られたとのことである。渡航が叶わず本授業が体験型、グループワーク主体の授業のため、学期途中で受講を断念することも考えたそうだが、授業内容の把握については問題なく効果が得られたとのことであった。

しかし、ハイフレックス型授業の場合、音声の反響の問題が多少生じたため、一部聞き取れなかった際、授業の録画データを活用し復習することが役に立ったそうである。また、グループワークや交流活動に不自由のない対面授業が最も望ましいが、次に全面オンライン授業、最後にハイフレックス型授業の順で受講しやすいとのことであった。これは、音声の反響の問題が大きく、皆がオンライン授業であれば音声の問題はほぼなかったとのことである。

また、安芸市の高校生との交流活動時もグループ活動の際、パソコンの距離の如何により、音声の問題が生じたという。しかし、LINEを通じた安芸市の観光ツアー活動では、海外にいながら高校生の詳細なガイドにより安芸市の様子がよく分かり臨場感がある体験ができ面白かったとのことであり、今後の体験型学習の示唆になる結果が得られたと言える。ただし、オンラインによる接続でも交流はスムーズに進むが、物理的にも精神的にも距離が感じられたと述べ、グループワークで仲良くなるのはなかなか難しいので、全面的に対面授業が望ましいとのことであった。

8. 終わりに

2021年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、交換留学生の受入れの中止に伴い、受講生は正規生の日本人学生が中心となり、受講した留学生3名もそのうちの1名は海外からのオンライン参加になった。また、体験活動は安芸市の高校生との交流活動のみであったが、Microsoft Teams及びLINEを活用したハイフレックス型授業が行われた。過去2年間対面で実施した企業見学は、今年度はMicrosoft Teamsを繋いだ交流活動になった。授業のテーマは前年度に引き続き、「多文化共生社会」という視点で地域振興を考える内容であり、各講義、活動実施後に行われる振り返り活動はすべてMicrosoft Formsを活用して行った。受講生が毎回の授業に真剣に取り組み、毎回の振

り返り活動に各取り組みから学んだことや自らの考えや気付きを回答してくれた。この積み重ねが最終グループ発表において、地域との互惠関係の構築や多文化共生社会における地域振興について解決策を提案するに至ったと言える。本取り組みを通して、今後個々人が自分事として地域振興を考えるきっかけになることを願う次第である。

授業の最後に、受講生は「私が考える地域との互惠関係を構築するための方策」と「私が考える多文化共生社会における地域振興の方策」の二つのテーマから一つ選び、レポートをまとめて提出した。それぞれのレポートが地域との互惠関係や地域振興を真剣に考える内容となっていた。ここにその一部を紹介する。

<受講生のレポート①>抜粋（教3年F）

テーマ：「多文化共生社会における地域振興の方策」

私のアイデアの一つとしては、低価格で住める場所を提供するということだ。東京などの都市部とは異なり、高知県は時給も低く、場所も不便である。だが、土地が多くあり、その単価も低い。それを生かして、外国人労働者の集合住宅を作ると、高知県に就職をしようと思う大きなきっかけになると思う。また、「逆ホームステイ」もいいのではないかと思う。外国人の方に家に住んでもらっても構わないという家庭に、外国人労働者が居候という形で住む。県として、受け入れると一定の給付金を出すというシステムにし、日本人もその労働者の方の故郷の言葉を学ぶとお互いの勉強、交流につながると考える（私たちが学ぶという視点から、「逆ホームステイ」にした）。

次のアイデアとして、高知県で外国人観光客に特化した体験活動を作ることである。高知城という歴史を生かし、「坂本龍馬なりきり体験」として着物をきて二七の刀をさし、カツオの薫焼き体験をするというのはどうだろうか。京都の太秦映画村のようなところにはなれないが、本当の海を着物姿でみることで、歴史ドラマの中にいるような気分になってもらえればなお良いと思う。また、高知の豊かな海の資源を生かす漁業体験もどうだろうか。カツオの一本釣りはもちろん、海女体験、溪流釣りなど美しい自然を生かして、それを楽しみながら体験活動ができる。

そして高知県をもっと交通の便が良い県にすることである。外国人に来てもらおうとすると、乗り換えやバスなどとても困難である。よってバスを生かして、大阪の関空から高知への直行観光バスを作り、外国語を用いたSNS

で発信するのはどうだろう。さらにそのプランに、思い出に残る体験活動を入れるとなお良いと思う。交通の便を良くすると、外国からだけではなく、日本各地から人が集まる。また、最近高知県の「シーハウス」「雲の上の図書館」などのインスタ映えスポットに友人が遊びに来ていた投稿をたまに目にする。これは、インスタの「行くべき絶景カフェ・スポット」などで取り上げられてからとても多いと感じる。よって、SNSでいう“バズる”ために、インフルエンサーのスポンサーになるなど、SNSに力を入れることもとても大事である。

最後に、高知県はお洒落で美味しいカフェが多い。郊外にも多くの美味しいカフェがある。それをSNSで発信して、県外からのカフェ好きに来てもらうということを考える。

このように、高知県はとても良い素材の宝庫である。山、海、川（日本最後の清流）、そして高知県民の人柄など、まだ高知を知らない人が高知県に魅力を感じることは間違いない。私たち高知に住んでいるものとして、高知県をもっと楽しみ、理解を深めて発信していく必要があるのだ。

<受講生レポート②>抜粋（地域3年M）

テーマ：「多文化共生社会における地域振興の方策」

多文化共生社会において、生きやすくなるための環境整備と、現状の経済及び街づくりを発展させていき、よりグローバルで多様化した街づくりをすることが求められてくると思う。私はその事例を高知とポートランド（アメリカ）で考えた。改善しつつ私の街づくりの意見も適応することによって、地域振興が行えるのではないかと考えている。

ではどのような形で街づくりをしていくのが重要になってくる。ただ単に違う土地同士を結びつけるのではなく、ここで重要になってくるのは「環境」と「土地」の2つである。その例として高知とポートランドの文化や街づくりの融合が挙げられる。この2つの場所は地理的環境が似ているため応用可能ではないかと考えている。ポートランドは自然が豊富でコンパクトをベースに街づくりをおこなっている。市内に路面電車が発達していたり、自転車のレンタルを文化として定着させることによってコンパクトな街づくりを可能にしている。また人口も高知に近いことも共通点の1つだろう。少し異なるのが若者文化の発達が高知よりも進んでいる点である。アートや音楽・ファッションなどのクリエイターが多く住む街で自分達らしさを非常に

大事にする風土が存在している。

文化・街づくり融合の方法として三つの方法が挙げられる。

1つ目は文化融合を通じた金銭獲得だ。ポートランドではコンパクトシティではあるが、ショッピングモールなどにお金を落としてもらうことが多い。モール数も高知より多い。しかし高知の場合はショッピングモールはこれ以上増やすのは難しい。ならば小さいところにお金を落としてもらう必要があるだろう。例としてあげられるのは、高知は個人経営のカフェや服屋などの店が多い。それぞれの小さなところが色を持ち、他との差別化を図る必要が出てくるだろう。高知のカフェの「カワクボコーヒー」ではポートランドで飲んだコーヒーをベースに「コーヒーが飲めない人でも飲めるコーヒー」を制作する。またポートランド発祥のアウトドアブランドの「キーン」や「ペンドルトン」なども山が多くアウトドアが盛んな高知でも人気が出るだろうと思う。このように似ている環境の多文化を流入することによって、新たな付加価値が生まれるだろう。

2つ目は公共交通機関の応用である。ポートランドでは、公共交通機関の利用者を80%増加させた。以前までは高知同様、車社会だった。増やしたその方法の一例として、公共交通機関の環境整備が挙げられる。MAXトレイン・トライメットバスシステム・路面電車など、市民に様々な公共交通機関の選択肢を増やした上に、レンタルバイクなどのサービスも充実していることが利用者が増えた大きな要因だろう。このように環境整備を行うことでコンパクトシティの実現も夢ではなくなってくる。高知には既存の路面電車があるのでここをアップデートすることは他県との大きな差別化にも繋がるのではないかと考えている。

3つ目は若者文化の発達である。高知は山や海に囲まれて、本州とは遠い位置にあるため、今まで県外の文化の流入が少なく、流行とは断絶されてきた。故に独自の文化を形成したと感じている。それに加えてポートランドの若者文化を流入することによって、更に面白い融合ができ、若者移住の促進が図れるのではないかと考えている。ポートランドはDIY精神が成熟しており、アートや音楽の側面でも独自性を持っている。LAやNYとは違う形で形成されてきた。そのようなポートランド独自の文化を高知の文化と融合することによって、文化の街をつくり、東京とは違う形で若者が集う場所を形成できるのではないかと考えている。

以上三点の具体的な方策をより現実的に行うことによって、多文化共生社

会において、生きやすくなるための環境整備と、現状の経済及び街づくりを
発展させていき、よりグローバルで多様化した街づくりが可能になるのでは
ないかと考えている。

＜受講生のレポート③＞抜粋（理2年M）

テーマ：「多文化共生社会における地域振興の方策」

多文化共生社会における地域振興の方策について、スポーツ、観光、交流
の3つの観点から述べていきたいと考えている。

まずスポーツについてである。私は、スポーツは外国と日本をつなぐ言語
の必要のないツールだと思っており、多文化共生社会の構築にあたり多大な
影響を及ぼすものでないかと考えている。なぜならスポーツは言語を介さず
にルールを覚えるだけである程度コミュニケーションをとることができ、そ
れは全世界で共通だからである。さらに、スポーツを通して発展途上国など
と交流を行うことにより、お互いの国の発展につながったり有力な人材の発
掘にも繋がったりすると考えている。

また、外国だけでなく、地域との交流を盛んにし、連携をとることによ
って過疎地域などにおける人材不足などを補ったり、後継者がいないという理
由で開発が不可能になった伝統文化などの復興も可能であったりすると考
えている。

次に観光についてである。観光は言語的な要素と非言語的な要素を半分ず
つ兼ね備えたもので、外国人が日本に興味を持つ大きなツールとなるもの
であると考えている。観光地の発信や伝統文化の体験・発信においても、チ
ラシやパンフレットなどを用いて宣伝するほかにも、インターネットブログや
インスタグラム、TwitterなどのSNSを用いて発信することでより世界中にか
つより多くの人の目に留まる形で発信することができるため日本に興味を持
つきっかけを増やすことができると考えている。

また興味を持った外国人からアンケート調査を行ったり、協力を仰いだり
することで「観光客としての視点」を増やすことにより地域での伝統的な活
動の発信やそれを体験する仕組みをより外国人に優しく、外国人に興味を
持ってもらえるように改良することができるのではないかと考えている。

最後に交流についてである。交流は非言語的な要素をもっているもののそ
の大半を言語的な要素が占めているため言語的なものに依存するとともに、
外国人と日本人が直接やり取りをするため最も仲を深めやすいものであると

考えている。

私は大学生や高校生などを主体としたイベントのような交流会を開いたり、日本語教育をする場所を増やしたりするなどしていくべきであると考えている。さらに、はじめは大学生や高校生であっても地域の人と連携し、周囲の人を巻き込んでいくことで老若男女問わずそのイベントに参加し外国人との交流を図ることができると考えている。

そうすることにより外国人への偏見や抵抗がなくなるとともに外国人への待遇や外国人の労働環境住みやすさ等が大きく変わってくると考えている。その上、日本で暮らして行くにあたり日本語の文化を学んだ外国人を観光案内や伝統文化の発信などに加えることにより、より外国人としてわかりやすいものとなるのではないかと考えている。

<受講生のレポート④>抜粋（人1年M）

テーマ：「多文化共生社会における地域復興の方策について」

1. 多文化共生における問題点

八王子市では多文化共生について「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義している。このように定義はしているものの、実際に国籍や文化背景が違う人が集まると様々な問題が浮かび上がってくるのではないかと私は考えている。

まず、コミュニケーションの不足の問題である。高知県で増えてきている外国人労働者、技能実習生について言語能力不足によるコミュニケーションの欠如が問題になってきていると示唆された。現状の新型コロナウイルスなどの影響もあり、日本語教室を開くことができていない。それが引き金となり、英語も日本語も話すことができず日本人とのコミュニケーションがままならない状況が続いている。

2. 筆者の考える問題点の改善策

コミュニケーション不足、言語能力不足の問題を改善するため、日本人と外国人の交流の機会を増やすことを提案する。

具体的な方策としては、1つ目に交流会を定期的に関き、積極的な双方のコミュニケーションを増やすことが効果的であると考えている。他の県では、食を交えてエジプトの外国人技能実習生と日本人の交流を深めている県がある。食を交えてコミュニケーションを取ることでより良い関係構築に繋がっ

ていく。

2つ目にスポーツ大会、地区運動会のような催し物を日本人、外国人を交えて開催することが日本人と外国人との間にある壁を取り去ることに繋がるのではないかと考えた。また、地域で運動会などを行うことでその地域の活性化にも繋がり地域復興の手段としても有効であると考え。高知県でもこのような企画等が実施されておりこれから規模の拡大が期待される。

3つ目に日本語教育の充実である。外国人労働者や技能実習生の中には日本語、英語両方が不自由で日常生活にも支障をきたしていることがある。そこで、今期待されている「やさしい日本語」を取り入れていくことで外国人の方に暮らしやすく日本人とのコミュニケーションを楽しんでもらう狙いがある。また、日本語教室も積極的に開いていくことも重要であると思うが、会社、雇い主側が日本語を教える方が効率的なのではないかと考えた。直接教わることで仕事に 응용ができやすく、コミュニケーションの機会が図りやすいため、企業側、雇い主側が日本語を積極的に教えることを提案する。

いつか、外国人の方が安心して気持ちよく暮らし、働けるような制度・地域が出来、地域、人間が共に成長していける、より良い多文化共生社会になることを切に願う。

<受講生のレポート⑤>抜粋（人1年M）

テーマ：「高知県における外国人の意義と多文化共生～一人一人が主体に～」

1. 高知県で多文化共生社会における地域振興が求められる理由

高知県は人口減少と高齢化が全国的に見ても高い推移で起きていることが分かる。これらに伴って、一定の産業分野では人手不足が深刻化してきている。よって、高知県民で賄うことができない部分を、外国人に助けてもらう。これが現実的かつ現代社会においても効果的な方法であると考え。

現代社会において高知県民または、日本人だけが快適な地域では、地域を盛り上げることには限界がある。これから高知県を盛り上げていくためには、多文化共生「国籍や民族の異なる人々が、互いに対等な関係で生きていくことができる社会」、これを目標に街づくり・県づくりを行っていくことが必須である。実際に「行ってみたい」、「住んでみたい」と思ってもらえるような県に向けて、我々大学生や高知県民、企業などの、小さなコミュニティで取り組める方策を観光、交流の2つの観点からか述べていきたい。

2. 地域振興の方策（観光）

実際に授業で訪問した安芸市の野良時計周辺の観光地で、標識や案内板の数が少ないと感じた。また、それらの案内板は日本語を母語とする人々にとっても、難しいと感じさせる表記や表現であった。そこで、私は「地域に住む子供や学生による標識や案内板の作成」を提案する。例として野良時計の案内板の構成を挙げる。案内板の素材を安芸市の魚梁瀬杉を用い、そこに地域の子供から募集した野良時計の絵と、野良時計の説明を中高生が作成する。そして、中高生の作成した文章を他の言語への翻訳を大学生が担当。またその模様や制作過程の発信・拡散を、webデザインを学んでいる学生や、高知県出身、在住のブロガーさんにご協力をお願いする。このように、観光資源の前にあるたった1つの案内板の作成において、幅広い年齢の若者がそれぞれの持っているスキルや知識を用いて、地元を紹介する。これによって、作成側の学生も地元の文化歴史伝統の再認識ができ、若者流出や高知県について尋ねられた時に、語る事が可能になるのではないだろうか。また、この案内板は数年ごとに新たなものに置き換えると、継続的に行うことができる。そして、ここで使用する木材などの材料は、間伐材などの廃材やリサイクル品をリメイクすることで、環境にもやさしい方策ではないだろうか。

また外国で観光をする上で1つの大きな壁として言語壁がある。フィーリングや事前にインターネットを見て観光地について予習することも醍醐味である。しかし、私は地元の人から説明を受ける事が一番正確で、ユニークな経験として心にも記憶にも残ると考える。そこで私は「学生による、観光地の多言語ガイド」を提案する。高知大学の学生は共通教育で第二外国語を学習する。学部によってより専門的にその言語を学ぶこともある。中には将来その言語を話せることを目標としている学生もいる。そこで外国人観光客に対して学生が英語、仏語、中国語などを用いてガイドをする。これをボランティアや追加単位として実施することで学生も気軽にチャレンジできると考える。この制度を用いることで、外国人観光客にもネットやSNSには載っていない情報を知ることができる。また、学生側は実際に学んでいる言語のネイティブスピーカーと会話することで、モチベーションの維持やスキルアップそして、記憶に残る体験が行える。既にいくつかの地域では、英語によるガイドをしている。しかし、大学生が複数の言語を用いてガイドをするという取り組みは、とてもユニークで話題になると考える。

3. 交流を通しての地域振興の方策提案

お互いが暮らしやすい環境や関係を築くためにも、クリスマスやお正月などの各国のイベントの時期に食事会や料理会などの集まりを開催することを提案する。これは留学生がいる大学や、公民館で各国それぞれの料理を一緒に作ったり、グッズを持ち寄ったりそれぞれの地域や宗教の文化を共に体験し、「知る」。多文化共生社会であるからこそ、相手の文化や習慣をすべて理解することができる人、そうではない人があると考ええる。そのため、文化や考え方に共感や理解することを目的ではなく、知ることを目的で行うことが大切であると考ええる。

4. 各自想像できる観光マップ（地図）

私たちが土地感覚のない国や地域に旅行に行くときに、ガイドブックやSNSで事前に確認。また、それらを見ることで実際に行ってみたいと感じ計画を立てるなど、旅行や旅において大いに活用されている。より高知県観光を楽しんでもらうためにも、「my 高知県独自のマップアプリの作成」を提案する。簡略的に説明すると一般的なGoogleマップなどは、道案内が地図アプリの基本的な役割である。しかし、ここで提案する観光マップは、各々が足を運んだ観光地や飲食店など様々な場所の写真を自分のアプリ上マップに追加することで、世界に1つだけの my 高知県マップの作成が可能である。このアプリでは他のユーザーが作成した、観光マップを参照することができるような仕組みにする。このような機能があることで、my 高知マップの完成を目指してリピーターが増えると考え提案する。

<受講生のレポート⑥>抜粋（人1年F<留学生>）

テーマ：「地域との互惠関係を構築するための方策」

高知は全国的にも僻地にあり、その特殊な地理的位置は「陸の孤島」と呼ばれている。友達は私が高知に来ると知ると、「高知には何があるの」と聞き、いつも「山と水がある」と答えていた。しかし、この授業を受けて、高知の良いところを胸を張って数えることができるようになった。

まず、高知県民は酒が大好きなので、酒文化をテーマとしてアピールしてはどうだろうか。

実際、高知では「土佐鶴」や「司牡丹」などのブランドがすでに存在している。しかし、伝統派なブランドをいかに若返らせるか。例えば、パッケージのリニューアルや若いマーケットに向けた新しいフレーバーの開発などが必要となる。

次に、宣伝である。日本には体験学習ができる醸造所が少ないので、製造に参加できる醸造所を宣伝のポイントにして、メディア雑誌と連動して推奨すれば良いと思う。

そして、県内パッケージ旅行という選択肢を提案したい。高知到着後は、高知の主要な観光スポットをピックアップし、レンタルバスを使って移動するショートツアーに参加し、ガイドツアーなども行う。そこには蒸留所での体験が含まれるのもよい。そうすることで、一方では、交通手段がないために高知を訪れることを躊躇する観光客が減少し、他方では、高知への観光客が増え、経済が活性化することになる。

また、高知は外国人観光客が非常に少ないという弱点がある。ほぼ毎年、高知県は全国外国人観光客数ランキングの最下位である。これは、宣伝不足と交通の不便さが原因だと思う。中国のネットには、高知へ旅行する情報がほとんどない。

高知ははやっていない旅行先として語られることが少なくなく、個人的には、四国地方は日本で行きたい旅行先のリストの最下位に位置する。外国人観光客の最大の関心事は、交通と言語である。前述の通り、高知の公共交通は不便だが、このようなツアーがあれば、観光客も参加するだろう。言語面では、高知では英語の看板をたまに見かけるが、日本語の看板の方が圧倒的に多い。他言語の看板をつけるのはコストがかかるので、まずはガイドツアーから始めて、高知の留学生にアルバイトをしてもらって、正社員の雇用コストを抑えつつ、高知の文化を的確に伝え、紹介してもらうことが出来る。

また、高知龍馬空港には国際線がないため、直接四国に行く場合は、まず香川県か愛媛県に行くしかない（上海発）。目的地の高知までのルートを複雑にするよりも、単純に四国を1つにまとめたらどうだろうか。「謎の四国」をプロモーションポイントにして、探検のイメージを持たせることで、高知を訪れる外国人観光客を増やすことができるかもしれない。

以上、非常に大きな概念を話したが、実用化には多くの問題があるはずである。しかし、高知の自然の美しさ、人々のもてなしの心、そして高知の特徴である食が世界に知られていないのは、世の中の人に大きな損失だと思われる。話題を1つか2つ作って、SNS（日本のソーシャルメディアも含むがこれに限らない）でのプロモーションを強化することで（例えば鳥取県は、中国のソーシャルメディアに専任の担当者が公式アカウントを運営し、うまくいっている）、コロナ後のリベンジ観光の波にも一定の効果が期待できる

のではないかと思う。

注1：文中で引用した受講生の所属は、以下の通りである。

- ・人〇年M or F = 人文社会科学部〇年生男性or女性
- ・教〇年M or F = 教育学部〇年生男性or女性
- ・理〇年M or F = 理工学部〇年生男性or女性
- ・地域〇年M or F = 地域協働学部〇年生男性or女性
- ・農〇年M or F = 農林海洋科学部〇年生男性or女性
- ・土佐〇年M or F = 土佐さきがけプログラム〇年生男性or女性
- ・非正規M or F = 交換留学生男性or女性

注2：学生アンケート及びレポートの文章は読みやすいよう授業担当者による修正を施した。

謝辞

本プログラムの実施に当たり、講義については、ビジターセッション①と③では高知県産業振興推進部計画課竹中様及び高知県商工労働部雇用労働政策課山中様、ビジターセッション②では集落活動センター「そばの里 立川」の立川地区活性化推進委員会委員長吉川様、高知県大豊町産業建設課長谷川様並びに、高知県産業振興推進部地域支援企画員（大豊町）宗崎様、ビジターセッション④では高知ファイティングドッグス球団株式会社北古味様、ビジターセッション⑤では高知大学次世代地域創造センター赤池准教授のそれぞれのご協力を得て実施された。体験学習については、高知県立安芸桜ヶ丘高等学校情報ビジネス科の先生方並びに生徒の皆様、そして企業とのオンライン交流活動では廣瀬製紙株式会社のご協力を得て実施の運びとなった。また、プログラム全体の構想や運営について、高知県中小企業団体中央会連携推進部の古木様、高瀬様にいろいろとお力添えをいただいた。この場をお借りして本プログラムの実施にご協力くださった皆様方に感謝の意を申し上げます。

参考文献

- 飯吉弘子（2021）「大学統合におけるオンライン教育の活用と質保証 —その可能性と課題—」名古屋高等教育研究 第21号、pp.27-48
- 宇田光（2021）「ハイフレックス型授業の可能性と課題—(1) 理論と大学での実践—」南山大学教職センター紀要第8号、pp.14-23

- 大塚薫・林翠芳 (2016) 「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題—高知文化事情に触れる体験を通して—」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
- 大塚薫・林翠芳 (2017) 「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築—地域文化・観光体験調査の結果を通して—」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
- 大塚薫・林翠芳 (2018) 「高大連携による地域文化体験を通じた交流学習活動の教育効果—地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として—」『高知大学留学生教育』第12号、pp.45-77
- 大塚薫・林翠芳 (2018) 「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回JAISE年次大会(研究大会・総会) proceedings』 pp.#32-5-1-2
- 大塚薫・林翠芳 (2019) 「インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築—国際共修による双方向往来の学びを通して—」ウェブマガジン『留学交流』2019年9月号 Vol.102 pp.13-24
- 島崎薫 (2017) 「地域住民との国際共修—留学生のアイデンティティの変化に着目して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第3号、pp.227-237
- 島崎薫 (2018) 「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか—仙台すずめ踊りの実践を通して—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第4号、pp.397-406
- 週刊経団連タイムス 2021年2月11日 No.3487 「多文化共生社会の形成に向けた取り組みを聴く」
- 末松和子 (2014) 「キャンパスに共生社会を創る—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—」ウェブマガジン『留学生交流』Vo.142、pp.11-21
- 総務省 (2017) 『多文化共生事例集～多文化共生推進プランから10年 共に拓く地域の未来～』
https://www.soumu.go.jp/main_content/000476646.pdf
- 大学ポータル用語辞典 <http://www.shigaku.go.jp>
- 中沢知史 (2021) 「オンライン授業余滴—コロナ禍のなかでの南山大学 2020 年度スペイン語教育実践報告—」南山大学教職センター紀要第7号、pp.48-54
- 林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2017) 「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90
- 林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2018) 「留学生と日本人学生の共修によ

る地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築」『高知大学留学生教育』第12号、pp.23-43

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ (2020) 「体験学習を通じた留学生と日本人学生の国際共修授業—地域との互惠関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成—」『高知大学留学生教育』第13号、pp.55-86

林翠芳・大塚薫 (2021) 「多文化共生社会における地域振興構築に向けてのマインド形成—」『高知大学留学生教育』第14号、pp.47-74

Beatty, B. (2020) Hybrid-Flexible Course Design Implementing student-directed hybrid classes. EdTech Books. <https://edtechbooks.org/hyflex>

LIN Cuifang

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授)

おおつか かおる

(高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授)